

総 括

夏期日本語教育ディレクター

半田 淳子

今年度の夏期日本語教育は約 20 カ国から 100 名の受講生を受け入れた。7 月 4 日(土)の登録日に始まり、8 月 14 日(金)に終了した。今年は、昨年から引き続く円高の影響もあり、応募者数が例年より若干少なかった。また、期間中の新型インフルエンザの流行も懸念され、グローバルハウスに男女別の特別室を設け、患者が認められた場合の使用に当てた。なお、今年は梅雨が明けても雨降りの日が多く、冷夏であったせいも、体調不良を訴える学生が例年よりも少なかった。また人数が少なかったため、関係部署の協力を得て、学習面と生活面の両面でより細かな指導ができた。

1 クラス編成

本年度は、C8(帰国生レベル)の該当者がいなかったため、このレベルのクラスは開講せず、7 レベルを開講した。そのうち、2 セクションにしたのは、C1 と C4 である。C1 は講師の都合により、3 人で 2 セクションとなり、部分 2 セクの形を取った。合計 9 クラスとなり、講師 17 名が担当した。

2 カリキュラム

JLP のカリキュラムに合わせて、70 分授業を 3 コマずつ、月曜日から金曜日まで行った。午後の文化プログラムへの参加も奨励し、レクチャーへの参加を義務付けた。ほぼ全員の学生が何らかのプログラムに参加した。

3 授業見学

新型インフルエンザ発症の対応に追われていたので、授業見学は 1 週目にはほとんどできず、2 週目から 3 週目の初めにかけて、主任と教務主任で個別に行い、それぞれの講師にフィードバックを与えた。4 週目の後半から 5 週目にかけて、2 回目の授業見学を部分的に実施した。

4 宿舎

学内はグローバルハウスのみ、その他の宿舎としてはホームステイ及び学外の学生会館を利用した。ホームステイをする学生に対しては全体でオリエンテーションを行い、その後、1 週目と 4 週目に面接を行った。新しい受け入れ先もあったが、学生との間で特に問題もなく、ホームステイは満足度の高い形で終わった。

5 カウンセラー

3 週目以降、精神的なストレスと思われる症状の学生も認められたので、4 週目と 5 週目の金曜日の午後に、カウンセラーを手配し、学生の心のケアに当たってもらった。この期間は大学が一斉休暇に入ることもあり、来年度以降、看護師の配置と同様、カウンセラーの ICU 訪問も定期的に設けるのが望ましい。

6 富士山登山

昨年は富士山登山に行き、下山途中で道を外れ、帰宅が著しく遅れた学生がいたため、安全面にも配慮して、本年度は旅行会社が企画するツアーのみ参加を許可する形を取った。8月1日から2日にかけて行い、学生と関係者が44名参加し、無事に登頂し、予定通りに下山した。

7 訪問者

カザフスタン日本センター日本語課プログラム・オフィサーのチョルボン・カンバライエヴァ先生と日本国際協力センター(JICE)の田中もえ子氏、渡辺寛美氏、田中佑美氏が来校し、8月4日(C1、C2、C4)と5日(C3、C5、C6)の両日の授業を見学した。午後は、教務主任とともに、質疑応答などの対応をした。

8 スコットランド日本協会の奨学金

今年度より、スコットランド日本協会 (Japan Society of Scotland) が授与する奨学金「トーマス・ブレイク・グラバー・アバディーン・アセット・スカラシップ」により派遣された留学生1名が受講することになった。スコットランドの企業、アバディーン・アセット・マネジメント社の出資により実現したこの奨学金は、長崎にあるグラバー園などで名が知られるグラバー氏が、スコットランドの都市アバディーン出身であることから、日本にゆかりの深い同氏を記念して設立されたものである。

9 その他

来日直後に新型インフルエンザを発症した学生がいたが、迅速な対応により2次感染もなく、2週間からは授業に復帰した。ホームステイの学生が1名、プログラムが開始されて1週間が経過しても来日せず、連絡も取れずにいたので合格を取り消した。ホームステイ先には、その期間の費用を日割りで計算して支払った。